

大学生の進路に関する意思決定プロセス —社会人のキャリアストーリーとの関連に着目して—

小 山 知 子

1. はじめに

本研究の目的は「ライフプランニング」の受講生を対象に、①卒業後の進路を決めるにあたり、どのようなプロセスで意思を決定するのか、②①において、社会人のキャリアストーリーによる学びがどのような影響を与えるか、を検討するものである。

平均寿命が延び、長きにわたる人生（ライフ）をどう充実させるか、老若男女問わず、現在の関心事である。社会で、「人生 100 年時代」「多様な人材の能力を活かす」「女性の活躍推進」など、生き方、働き方に関するフレーズが飛び交っている。そのような流れが後押ししたのか、筆者が担当する「ライフプランニング」は、1 年間で前年の 3 倍にあたる 538 名が受講した。

Koyama (2013) によれば、教員の前職での体験談や人生の節目に関わるエピソードは、就職活動や日常生活で辛いことに遭遇していたり、気持ちが落ち込んでいる学生を励まし、発想を転換することになるという。「普通」「標準」とみなせるような生き方が成り立たなくなっている現在、多様な進路選択があること、そのうえで社会人、あるいは教職員の歩みや失敗経験をじっくり聞き、時には質問する機会を持つことが必要だと考える。中には学校卒業後、すぐに定職を持たなかった人、正社員として働いた後、結婚・育児を経て非正規雇用で働いている人、資格試験に挑戦して合格後に転職した社会人もいるであろう。大学生がそういったストーリーを聞くことにより、ライフプランのレールから外れてしまったらどうすればよいのか、またレールをどう修正していったらよいのかを見出せるのではないだろうか。つまりキャリアストーリーの紹介は、ライフプランには何通りもあり、さまざまな選択肢があ

るということへの理解を促す効果があると考ええる。

そこで、本研究では、講義だけでは知り得ることができない大学生の進路に関する意思決定の過程を明らかにし、キャリアストーリーによる影響を分析していく。そのうえで、キャリア形成支援に対する知見を述べていきたい。

2. 現在のキャリア教育の現状

現在のキャリア教育には、大きく分けると 3 つのジャンルがある（児美川 2013）。一つは「自己理解」系である。自らの進路や将来の仕事を考えていく前提として、自己の能力や適性、志望などを見つける学習である。場合によっては「職業興味検査」を受け、客観的なデータと照らし合わせ、つきたい職業について考えてみることもする。

二つ目は「職業理解」系である。自分が興味、関心を持っている職業について調べる、特別講師として職業人の講話を聴く、職業人にインタビューするといった学習が挙げられる。職場体験（インターシップ）もこれらの理解を深めるための体験型学習である。

2 つのジャンルを踏まえ、「キャリアプラン」系の学習がある。「就きたい職業」と「現在の自分」を照らし合わせ、少し先の自分を展望するというものである。「ライフプランニング」の授業は、①多様なライフキャリアについて知り、②今までの自分の歩みを振り返り、現在を見つめたうえで未来への向き合い方を学ぶ（小山 2018）ことを目的としており、これに該当するといえよう。

「キャリアプラン」系の授業について、児美川（2013）は、それぞれの年代、すなわちライフステージで直面することになる問題や課題、仕事と生活をどう両立させ、どう折り合いをつけるのかといった

点にも注目することが大切だと指摘している。そのうえで、信念や確信を持っている人々の生きざまなどにも触れてほしいと述べている。

この観点から、「ライフプランニング」の授業においては、社会人たちが転機、節目に接し、どのよ

うな選択をしてきたのか、どんな信念を持って仕事にあたってきたのか、というキャリアストーリーを取り入れる。男女2名のゲストスピーカーおよび筆者の略歴と講話の内容については、表1、表2及び表3に表す。

略歴	大学卒業後、社会人野球の選手として野球部に6年間、在籍。その後、2年間コーチを務める。30歳でユニフォームを脱ぎ、社業に携わる。2年後に同野球部監督に就任。以後、6年間監督として指揮をとる傍ら、7名の選手をプロ野球に送り込む。現在は人材開発部の部長として、新入社員をはじめとした社員教育に従事している。
講話内容	プロ野球選手になることを目標に、社会人野球の選手として民間企業に就職。最終的にドラフト指名されず、26歳で選手を引退。引き続き、コーチを務めた後、30歳になって初めて社業に携わった。年下の社員が仕事を教えてくれ、本当に意味での「感謝」と「チームワークの大切さ」を知った。そして、野球で培った「明るくあいさつをする力」を活かせば、すべての仕事を前向きに進められ、企業人としても道が開けるとわかった。与えられた場所で花を咲かせる努力をすれば、どこかで必ず誰かが自分を見て評価してくれるはず。だからこそ、目標を持って欲しい。そして「目標がその日その日を支配する」と心に留め、これからの学生生活を過ごしていったらいい。

表1 男性ゲストスピーカー A氏の略歴と講話の内容

略歴	大学卒業後、IT企業に就職。約3年間、開発部門にて給与システム開発および運用に従事。その後、お客様向け研修や県・諸団体の営業を担当する。入社11年目に結婚し、仕事と家庭との両立が始まる。配偶者の理解と協力のもと、就業継続し、エキスパート級（課長補佐）への昇格を果たす。ここ4年ほど、埼玉県働く女性応援メンターに就任し、大学の授業に登壇している。
講話内容	大学時代は、情報工学を専攻し、警察官の父を見て「サイバー方面で活躍する警察官」を目指していた。しかし、準備不足が失敗を招き、警察官への道を断念。思い描く未来へは、実現可能性の高い道が存在したはずで、徹底的に調べ、努力すべきだったと学んだ。得意分野を活かしたIT企業に就職する。以後、収入を得て、多くの人と出会い、人生経験を積むことができることに仕事の醍醐味を感じている。働き続けると新たな自分の能力に気づくことができる。だからこそ、自分の将来に対し、さまざまな見方、捉え方ができるようになって欲しい。

表2 女性ゲストスピーカー B氏の略歴と講話の内容

略歴	大学卒業後、客室乗務員として就職。6年間、国内・国際線に乗務。結婚後、1年間は就業継続するが、家庭生活との両立が難しく、退職。その後は専業主婦として育児に専念。32歳のときに小学生に英語を教室を作り、主宰する傍ら、大学で授業を担当する機会を得て、大学講師、キャリアコンサルタントの道に進み、現在に至る。
講話内容	なりたくなかった客室乗務員の仕事、特に国際線乗務にやりがいを感じ、充実していた。結婚後は不規則な勤務、自身の転勤により、退職を決意。女性が仕事（キャリア）と家庭（ライフ）のバランスを取って働くことの難しさを痛感した。しかし、もう一度社会に出て働きたい、という気持ちから英語学習を再開し、夫の協力を得て土曜限定の英語教室を始める。以後、元の会社で大学講師の派遣をしていると知り、応募。採用され、非常勤講師になる。無職期間（ブランク）に自分が仕事で実現したいことが見え、必要な学習が何かが分かった。自分次第で道はいかようにも開けていくものだと思う。

表3 筆者の略歴と講話の内容

3. 「意思決定」に関するキャリア理論

(1) 意思決定に関する現状と課題

大学4年生になると、進路に関する意思決定が本格化する。就職が多数派であるが、進学、あるいは未決定のまま卒業して行く学生もいる。

将来が不透明、かつあらゆる変化が予想される現在において、学生たちが自らの意思を決定していくのは非常に難しく、ともすると後ろ向きになりがちである（松永 2001）。また、インターネットの普及により、学生たちのもとには日々、多くの就職関連の情報が送られてくる。自分に必要な情報、そして信頼性の高い情報がどれなのかという選別に苦慮している者も少なくないと感じる。

この点に関して、意思決定理論の第一人者である Gelatt, H.B. は、2001 年の日本での講演会で、①情報はあればあるほど、選択肢は増える、②①により、

さらに意思決定が難しくなり、不確実性は増す、と述べている。

以上のことから、先を見通すことが難しいにもかかわらず、情報はあふれている、というアンバランスな状況の中で、学生たちは進路に関して意思決定していることがわかる。

(2) 意思決定のプロセスと「肯定的不確実性」の概念

Gelatt (1986) は、意思決定を成立させるために次の 2 つの要件を挙げている。①すべての決定には決定を行う個人が存在していること、②情報にもとづく二つ以上の選択肢の中から選択して行動しなければならないこと、である。そのうえで、意思決定は「予測→評価→決定」の三段階システムで行われると述べている。

意思決定のプロセスについては、表4に表す。

ステップ	システム	評価内容
1	予測システム	選択可能な行動とその結果の予測を行う →自分の客観的な評価と選択肢が合致しているか、マッチするか
2	評価システム	予測される結果が自分にとってどのくらい望ましいか →外的な望ましさ（知名度、給与など） 内的な望ましさ（自分の適性、価値観に適合しているか、職務内容に興味があるか）
3	決定システム	ステップ1と2のシステムの結果にもとづき、最終目標に合う選択を行う →意思決定する

表4 Gelatt の意思決定プロセス（筆者作成）

ステップ1の「予測システム」では、学生たちは職業人に接触し、話を聞く機会を持つことが考えられる。さらにインターンシップ、教育実習などの職場体験にも参加できれば、自分の持っている職業イメージと現実とのすり合わせが可能となる。

ステップ2の「評価システム」では、ステップ1での評価をもとに、実際にその仕事を目指すにあたって、再度、自己理解を促すことを目的としている。就職活動する前に、業界、職種に関して下調べをし、会社説明会に足を運ぶのが一般的である。興味関心を持つ企業を選んでいく際の基準として、知名度、給与、福利厚生制度などの外的な要因をこの段階で検討するのである。同時に、仕事に対し、自分はどのように能力発揮できるのか、についても再考し、ステップ3の「決定システム」で最終目標に合った選択をする。

上記に加えて、Gelattは「肯定的不確実性」(Positive Uncertainty)の概念として、①将来を不確実なものとして受け容れる、②不確実だからこそ、いろいろなことができる可能性がある、と捉えることを提唱している(Gelatt, H.B., 1991)。

宮城(2002)によると、これまでの意思決定は、情報処理、理論的アプローチ、いわゆる左脳型アプローチがほとんどであった。しかし、Gelatt(1991)は、夢や感性、直観にもとづく意思決定も大切であるとする、右脳型アプローチを加えた、「全脳型アプローチ」の意思決定を取り入れるべきだとしたのである。

そこで本研究では意思決定プロセスと「肯定的不確実性」の概念に着目し、次の2点を明らかにしていきたい。①4年生は、どのようにしてステップ1～3に沿って卒業後の意思決定を進めていくか、②①に関し、さまざまな経験を積んだ社会人のキャリアストーリーがどのように影響するか、である。授業開始時と終了時の2時点でのインタビューを通じて、意思決定の過程を考察していく。

4. 調査の方法と分析の視点

(1) 調査対象者の条件と選定

2018年4月に「ライフプランニング」の4年生の受講生のうち、3名に協力を依頼した。3名に対しては、事前に研究目的を始めとする研究計画と倫理的配慮を説明し、データ等を使用する旨、口頭にて説明したうえ、文書にて承諾を得た。

5月初旬と7月末の2度にわたり、半構造化面接法を中心とするインタビュー調査を実施した。面談時間については、第1回目は約30分、2回目は約60分であった。発話内容をICレコーダーで録音し、後日逐語録を作成した。質問項目については

①残りの大学生生活、卒業後の人生について、どのように考え、展望しているか

②(2回目のみ)ライフプランニングの授業を受け、どのような変化を感じているか

である。考えが確立していない可能性もあると考え、できるだけ自由に語ってもらった。

3名の学生のプロフィールを表5に表す。

	学年	性別	現段階での意思
Xさん	4	男	就職
Yさん	4	男	進学
Zさん	4	男	未定

表5 調査対象者のプロフィール

(2) 分析方法と視点

調査対象者による2度の語りをGelatt(1986)の「意思決定のプロセス」に従って分類する。1回目の面談はステップ1「予測システム」、2回目の面談はステップ2「評価システム」と3「決定システム」に該当する。ステップ2においては、「肯定的不確実性」の概念の受け容れとキャリアストーリーの影響を考察する。

5. 大学4年生の意思決定プロセス

(1) 就職希望のXさん

中学3年生のとき、インフルエンザにかかり、自宅療養している期間に「GOOD LUCK!!」という

航空業界の仕事に携わる人々のドラマを観た。これを機にパイロットや整備士という職業に関心を持つようになった、という。高校卒業後、航空整備士を目指し、専門学校に入学。学習を重ねたが、実際に航空会社の整備士として就職することは難しく、狭き門であるとわかる。整備士以外の職業に目を向ける必要があると考え、専門学校を中退し、1年浪人の末、受験を経て大学に入学した。

ステップ1 予測システム（第1回面談時）

今の段階で卒業後の人生についてどのように考えていますか？

「今の時点で卒業後の人生については、正直、あんまり考えられていないですね。内定とかももらっていないので、何とも言えないんですけど、やりたい職業に就いて楽しく仕事をしていきたいと思います」

どんな職業を考えているのですか？

「一生、飛行機のそばで仕事したいと思っています〔選択可能な行動〕。飛行機が好きになったのは、中学3年の時です。そこからさらに意識するようになったのは、専門学校に入った頃ですね。事務の仕事は合わないです〔自分の客観的な評価〕。だから、総合職には興味がないですね。今の時点では、グランドハンドリングか、ドクターヘリの会社か、あと1社、総合職で整備士になれる会社があるので、そこを見えています。これらは全部、インターンシップにエントリーして、選考に通って参加できた会社とそうでないところがあります。職種にこだわらずに飛行機、空港に関わる会社を幅広く受けるつもりです〔選択可能な行動〕」

ステップ2 評価システム（第2回面談時）

授業を受けて感じる変化は何かありますか？

「具体的な目標が立てられるようになった、時間を決めて何かをするっていうのができるようになったと思います」

どうしてそう感じるのですか？

「ゲストのAさんのお話かもしれません。すごく良かったし、心に響きました。僕は整備士という目標を持って専門（学校）行ったけど、中退という日本人の普通の枠から外れているという思いがあって、悩むことが多かったんです。Aさんの話をきいて、目標を持ってまっすぐ進んでうまくいなくてもいいような道がある、と思えて、モヤモヤとしていた人生観を修正してくれたのかなって思いました」

Aさんもプロ野球選手をめざしていましたが、球団に指名されずに…。

「はい、失敗しているから次、そのまた次になるかもしれないけど、成功が来るって話されていました。僕の場合も大学に入る前の失敗があったから、今回の本選考でうまくいったのかなと。実のところ、気持ちが悪えないまま、就職活動に入ったんです。夢を持つこと、目標がその日その日を支配するっていう話を聞いて、人生において大切なことが分かった気がします。失敗を恐れて動かないのではなく、うまくいなくてもまたチャレンジする、すぐ動くことがいかに大切かって」

ステップ3 決定システム

就職先はどのような考えで決めたのですか？

「独立系エアラインの総合職、整備職に決めました。あきらめずに頑張ってきた甲斐がありました。この会社は学歴を一切、見ていないって言うんですよ。すごく多様性を重んじているなって言うのが分かって〔ステップ2：内的な望みしさ〕。もちろん、やりたかった整備士の仕事もできるっていうのがありますけどね〔最終目標に合う選択〕」

他の企業はいかがですか？

「グランドハンドリングの会社も1社内定し、ほかの選考も受け進んでいたのですが、途中で辞退しました。グランドハンドリングの会社は、大手航空会社のグループ企業なので、知名度もあるし、最初のうちはこちらの方が給料、いいんですけどね〔ステップ2：外的な望ましき〕 どうしてこっちにいかないのか、って友達にはずいぶん言われましたけど」

(2) 進学希望のYさん

日本人の父、タイ人の母を持つ。その関係で現在に至るまで、幼少のころからタイと日本に数年ずつ住む生活を送った。人に迷惑をかけない、自分で考えて行動しなければならないという生活環境で育った。中学生になってからは日本で暮らしているが、時として日本の集団生活になじめないと感じることもあったという。そんな自分のバックグラウンドから、日本に働きにくるタイ人の手助けをしたいと思い、大学に入学した。

ステップ1 予測システム (第1回面談時)

今の段階で卒業後の人生についてどのように考えていますか？

「そうですね、私はタイで生まれて、3歳までタイにいました。母とはいつもタイ語で話をしています。韓国にも4か月だけなんですけど、留学に行きまして、(韓国語で)話ができます。そういった語学的能力を活かして、日本に働きに来る韓国人やタイ人の相談にのれるような仕事がしたいんです〔自分の客観的な評価〕。7月から法科大学院の試験が始まるので、それに向けて勉強しているところですね〔選択可能な行動〕」

明確な目標があるのですね。法科大学院への入学が決まったあとについてはどう考えていますか？

「4月に入学なので、うまくスタートが切れるよう、

12月に行政書士の試験を目指して勉強しようと思います。勉強漬けでしょうね。不安は…なくはないです。司法試験は落ちる人が多いし、その後、受からなかった、っていうときに自分はもう一回受けるという気持ちになれるのか…。25歳までの青写真は変わらないけど、試験の結果次第で自分の目標がどうなるか〔自分の客観的な評価と選択肢がマッチするか〕。そういう意味で、授業では今後どんな変化が起こり得るのかを知って、具体的な見通しを待てるようになりたいです」

ステップ2 評価システム (第2回面談時)

授業を受けて感じる変化は何かありますか？

「実体験の話、キャリアストーリーがすごく良かった。人間は人とつながるところに道ができて、決まっ
ていくんだなって。司法試験を目指しながら、受かったあとも資格だけで仕事ができないってことは分
かっていましたが、仕事ってどんな風にするのか、
ぼんやりしていたんです。人を受け容れる器を持つ
というか、人のために何かをしてみようと思うよう
になりました。今までそういうのが苦手で避けていた
ので〔内的な望ましき〕」

人のために何かをしたいという思いとは？

「人を元気にさせる、僕と話していてモチベーションが上がる、という感じでしょうか。
自分にしか救えない弱い立場の人を救いたいから弁
護士になろう、と思ったのですが、これが達成でき
れば、別の職業に就いても平気だって思うようにな
りました。〔内的な望ましき、肯定的不確実性の受け容れ〕。もちろん、今の段階でしたいことに合致
しているのが弁護士だと考えたので、これに対して
真剣に取り組むことには変わりはないですけどね」

ステップ3 決定システム

進路についてはどのように考えていますか？

「夏に受ける大学院が第一志望なので、勉強です。特待生制度を敷いている大学院は 1 校、すでに合格しています。最終的には、外国人労働者の問題、文化や生活習慣での相談にのれるような弁護士になりたいです〔最終目標に合う選択〕」

(3) やりたいことがたくさんある Z さん

高校までは運動部に所属し、部活動中心の毎日を送った。大学でも部活動が続けたいと考え、セレクションを受け、仮入部後に入学。しかし、ほどなくして退部した。以後、部活動に代わるものを、と考え、1 年ごとにいろんなことをしてきた。1 年次は他のスポーツに挑戦、2 年次は教職課程、3 年次は長期休みを利用して海外に短期留学をした。留学の費用、学費など、できる限り自分で支払うため、新聞配達、引っ越し業、運動能力を活かしてゴルフスクールのコーチをするなど、あらゆるアルバイトを経験してきたという。

※教育実習のため、2 度のゲストスピーカーの授業は欠席

ステップ 1 予測システム（第 1 回面談時）

今の段階で卒業後の人生についてどのように考えていますか？

「楽しみという気持ちが大きいですね。その理由としては、不安になるほど、物事を知らないからだと思います。まず 6 月に教育実習に行きます、母校に。社会科の免許を取ろうと思っていて。実際、それよりも英語の方がやりたいなっていう気持ちが強いです。だから、大学院に行くか、就活はしないでワーキングホリデーで海外に行くかの二択だと思うんです〔選択可能な行動の予測〕」

「正直なことを言うとまだ働きたくない。みんなは 22 歳は大人で働かなくちゃって思っているみたいですけど、僕はもうちょっといろんな人と関わりたいって思うんです〔自分の客観的な評価〕。大学入

学前に部活動を辞めちゃったから、1 年ごとにいろいろやってみたことが出てきちゃって、絞れていないんです」

ライフプランニングの授業では、少し先の自分についても考えていきます…。

「中学くらいから計画性がないって人に言われています〔自分の客観的な評価〕。留学もよく調べずに行って、トラブルに巻き込まれたり、バックを盗まれそうになったり、いつも行き当たりばったり。綿密に段取りを組んで何かをするっていうのが苦手ですね。授業を受けて、将来的にはこういうことがあって、それまでにこれとこれをやらなくちゃっていうことがわかるようになります〔結果の予測〕」

ステップ 2 評価システム（第 2 回面談時）

授業を受けて感じる変化は何かありますか？

「先を考えて、何年後にこういうことができるようになる、そのためにこういう風に行動する、って考えるのが苦手だったんです。今も苦手意識はありますが、授業を受けて人生を線で見えるようになったかな、と。ちょっと先まで見るようになって、今はこれをしなければならいんだって少し考えられるようになったかなと思います」

少し先を考えられるようになったのですね。

「はい、3 週間、教育実習に行って、社会科の教員という職業は自分に合っているかなって思いました〔内的な望ましさ〕。一日 2～3 時間しか寝ないで準備して、やっと伝えたいことを伝えられました。生徒がいるから頑張れたんです〔内的な望ましさ〕。これからますます変化していく社会で生きるために必要な知識を伝えるには、自分が多くのことを経験している必要があると思うんです。今、採用試験に受かったとしても深みがない。教員になる前にもうちょっといろいろ経験しておきたいなと思って」

ステップ3 決定システム

進路についてはどのように考えていますか？

「(今の大学の) 大学院に進学しようと思います〔意思決定〕。2 年目に大学の制度を利用すれば留学に行けるんです。それには一定水準の(英語の) 得点を取る必要があるの、勉強ですね。留学できたら院生生活は 3 年間になります。(社会科の教員として) 正規採用されるのは、かなり難しいし、枠が狭い。考えながら過ごしたいです〔肯定的不確実性の受け入れ〕」

キャリアストーリーは 1 回だけでしたが、話を聞いて何か感じたことはありますか？

「自分が学びたい、成長したい、関わりたいと思う分野の勉強をして、それを仕事につなげていくことが大切なのではないかと思いました。先生(筆者)は、ブランクは次への移行期間と捉えて育児と学習に充てた、と話していました。僕も大学院にいけたらまわりより 2～3 年働くのが遅くなる。『ブランクはマイナスではない』ということ忘れずに過ごしたいです」

6. 考察とまとめ

(1) 調査対象者の意思決定システム

3 名の大学 4 年生を対象に、Gelatt (1986) の「意思決定のプロセス」に従って、発話データを分類した。その結果を表したものが図 1 である。

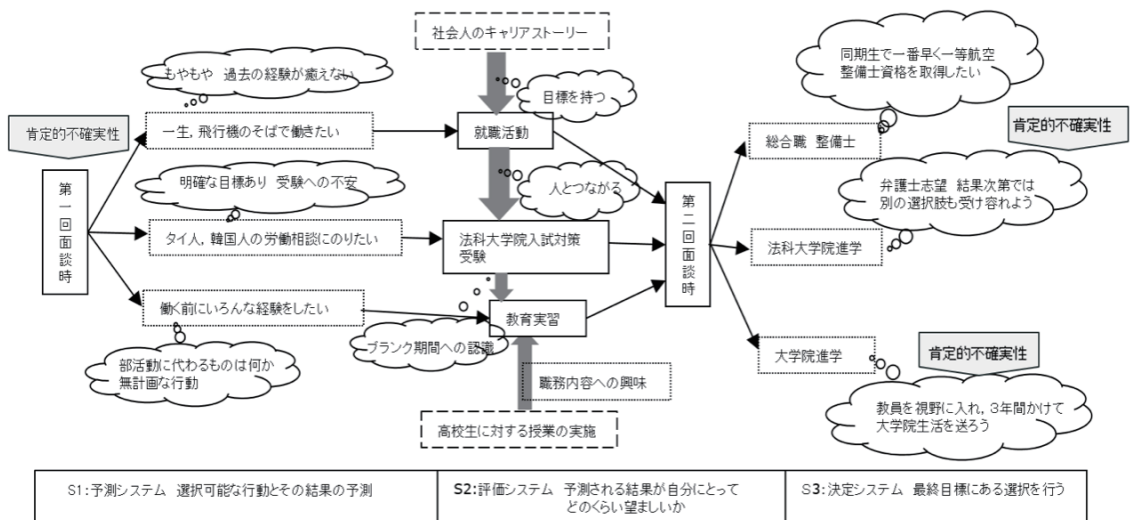


図1 4年生の意思決定プロセス

Xさんは、テレビドラマの影響から、直感的に航空業界で働いてみたいと考えていた。専門学校をやめた時点で「肯定的不確実性」の概念を持ち、選択肢を広げるための学習を始めていたことが分かった。大学に入り、仕事をすることにあって実現したいことは何か、再考した時に「飛行機のそばで働く」ことにあると考え、必要な情報を入手し、就職活動に臨んだのである。整備職に内定し、今では入社後のビジョンとして「同期で一番早く一等航空整備士

資格を取る」ことを掲げている。

Xさんとは対照的にYさんは、肯定的不確実性の概念を受け容れないまま、4年生になっている。法科大学院に進学し、弁護士になる、という希望を持ちつつも、一人で行動することが多く、勉強しつつも時折、不安になるとのことであった。しかし、2回目の面談では、「外国人の労働相談ができるようになる」ことを基盤とした仕事内容であれば、職業は弁護士以外でもよいと考えられるようになっていく。

Zさんは、部活動で活躍したいと思い、入学を決意したが、退部し、代わるものを見つけながら3年間を送ってきた。幼少の頃から運動に励んだ分、他の世界を見ていなかったという。第2回の面談時には、教育実習を終え、大学院進学、そしてやや直感的に教員という意味決定をしている。肯定的不確実性の概念を受け容れつつ、今後いろんなことを学びたいと語っており、希望が変わる可能性も考えられる。

(2) 社会人のキャリアストーリーによる影響

キャリアストーリーのうち、3名に何らかの影響したと解釈する語りを枠で囲み、示した。これを見ると、人それぞれ、自身の意思決定に関連する言葉、メッセージを選択して受け容れ、自分の身のうえに置き替え、解釈していることが読み取れる。

整備士を目指しながらも断念した経験を持つXさんは、目標を持つことに対し、心のどこかに疑念を抱きながら、就職活動の時期を迎えた。しかし、A氏のキャリアヒストリーから、自分の長所を生かし、目標を持って行動しつづけていくと、自分に適した道が開けると解釈し、「モヤモヤしていた人生観を少し修正してくれた」と語っている。

Yさんは、大学院入試、その先の司法試験に向け、学習を続けていくにあたり、「不安はなくてはならない」状態であった。3名のキャリアストーリーから、自分が仕事を通じて成し遂げたいことへの認識が重要である、仕事を進めるにあたっては思っていた以上に人との関わりが影響すると解釈している。そのうえで、「最終的に希望する職業につけなかったとしても、ほかの選択に目を向ける気持ちが生まれた」と語っている。

Zさんは、自身が意思決定した卒業後の数年間をある意味で「ブランク期間」と解釈している。キャリアヒストリーにより、同級生よりも遅く社会に出ることへの気持ちを整理し、ブランクをプラスと捉え、学びたいことを深化させようとしている。

以上のことから、キャリアヒストリーによる学びは、卒業後の進路に関する意思決定を控えている学生に対し、過去の経験による疑念の修正、見えない

将来への不透明さに対し、少なからず影響を与えたことがわかる。

授業開始時及び終了後の2回にわたるインタビューを通じて見えたものは、3名の学生は予想以上にさまざまなバックグラウンドを持ち、「やりたいこと」と「やれること」を天秤にかけ、模索しているということである。だからこそ、キャリアストーリーを部分的に自分の身のうえに置き替え、疑念や不安の軽減につなげたと考えられる。

最後に、今後の4年生に対するキャリア形成支援に関し、本研究から見出した知見を3点、述べたい。1点目はXさんのようにほかの教育機関を経て入学している学生への支援についてである。大学入学の経緯を知ると同時に、①希望する進路を180度転換したのか、②基本的に希望は変わらないが、うまくいかないことも考え、もう少し選択を広げようとしているのか、をていねいに聞く必要がある。そのうえで、中退などの経験を人生の一部として「意味ある出来事」として位置づけられるよう、支援していくことが大切だと考える。

次に、Yさんのような進学希望の学生に対するキャリア形成支援は、なによりも進学先の決定に目が向くだろう。しかし、Yさんの語りにもあったように、不透明な将来に対し、少なからず不安を抱いている。よって、時には「なぜその学習をするのか、その先にどんな可能性が広がっているのか」に着眼した支援が望まれるのではないだろうか。

最後はZさんのように、明確な目的を持って入学したものの、それがなくなってしまった場合である。目標、目的に変わるものが見つからなければ、意思決定が後ろ向きになり、長引くという課題が浮かび上がる。こうした状況を予測し、早い段階で長年の経験から培った能力を引き出し、ほかに活かせるものは何か、ともに考えていく支援が必要ではないだろうか。加えて、何よりも、思っている以上に学生たちの歩みは多様であることを念頭に置き、彼らの直感を重んじながら接していくことが求められよう。

7. 今後の課題

本研究の今後の課題として次の点が挙げられる。調

査対象者が3名と少なく、全員が男子学生であるという点である。女子学生については、子供を産むというライフイベントが意思決定に関係する可能性もある。社会、企業において女性の活躍推進がなされる現在、女子学生の意思決定プロセスについても明らかにし、どのような支援が必要か、考えることを課題としたい。

参考文献

- 藤原美智子, 「ハリィ・ジェラッド キャリア発達における意思決定」『新版キャリアの心理学』渡辺三枝子編著, ナカニシヤ出版, 2007, 91-105 頁。
- Gelatt. H.B., “Positive Uncertainly : A New decision making framework for counseling.” *Journal of Counseling Psychology*, 1986.
- Gelatt. H.B., “Creatuive Desition Making. Using Positiive Uncertainly “ Crip Publications, Inc., 1991.
- 児美川孝一郎, 『キャリア教育のウソ』筑摩書房, 2013。
- Koyama, T. *Consideration of University Students' Motivation for Learning „Japan International Journal of Japan Academic Society of Hospitality management (JASH)*, Vol.2 No.1, 2013, pp.17-26.
- 小山知子, 「時間的展望に主眼を置いたキャリア科目『ライフプランニング』授業の実践 駿河台大学論叢 第56号, 2018, 151-161 頁。
- 松永美佐寿, 「将来が予測できない時代の意思決定とは～意思決定理論研究者 ジェラッド博士講演より～」『Works 第43号』ワークス研究所, 2001, 46-47 頁。
- 宮城まり子, 『キャリアカウンセリング』駿河台出版, 2002。

謝辞

ご自身のキャリアストーリーをお話くださったA氏とB氏, 2回にわたるインタビューに応じてくださった3名の受講生の方々に心からお礼申し上げます。